
1 人の巫女と不思議な力

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1人の巫女と不思議な力

【Nコード】

N0391C

【作者名】

ユーリ

【あらすじ】

朝風理沙と美希達の、ちょっとした友情の話。ハヤテや神父のリンも登場します。

（前書き）

執事！

それは仕える者・・・

執事！！

それはかしず傳く者・・・

執事！！！！

それは主の生活全てをサポートする、フォーマルな守護者・・・
そう！

これは1人の少女のため・・・

命をかけて戦う1人の少年の、超コンバットバトルストーリーなの
である！！

だが・・・

今回、そのメインヒロインであるお嬢様のさんぜんいんナギ三千院凧と、彼女のメイドであるマリアは出ない。

なぜなら・・・

今回の主人公は、生徒会3人娘の1人、あさかげりさ朝風理沙だからである！！
では、本編へどうぞ！！

彼女の名前は朝風理沙。あさかぜ りさ

私立白皇学院に通う、ごく普通の女子高生だ。

理沙の実家は、少しは有名な神社である。

要するに、彼女は巫女さんなのだ。

ただし、理沙には鷲之宮伊澄のような能力はない。

彼女は、お祓いの類で精一杯なのだ。

で、今日理沙は何をしているのかというと、休みで1日中ヒマなので、実家の手伝いをしていたのである。

あさかぜ りさ
朝風理沙

「フウ・・・実家の手伝いも疲れるな・・・」

理沙は今、巫女服姿で神社の庭を掃除していた。

理沙

「しかし、実家の手伝いは楽しい。それに比べて白皇学院の生徒会の仕事は大変だ。ヒナは人使いが荒いからな・・・」

このヒナというのは、生徒会長の桂ヒナギクの事である。

「いつもそういう風に生徒会の仕事をしてくれればいいのに・・・」

理沙

「どわああああっ！！？」

理沙は驚いて振り向いた。

「と、生徒会長が言っていました・・・」

理沙

「なんだ、伊澄さんか・・・」

そう、彼女がさっき説明した鷺之宮伊澄。

悪霊を除霊する能力を持った、スゴい少女だ。

・
方向音痴（しかも途中で目的地を忘れる）なのがタマにキズだが・・・

理沙

「しかし、今日は来るのが随分早いな？いつもならもう少し遅かったが・・・」

さぎのみや いすみ
鷺之宮伊澄

「今日ここに来る途中で彼女に会ったので、ここまで案内してもらいました。」

理沙

「彼女？」

「初めまして、ソニア・シャフルナースです。」

理沙

「あ、どうも・・・」

彼女の名前はソニア・シャフルナース。

テロリストを船に侵入させたり、父の仇として三千院家に復讐しようとしたシスターだ。

ちなみに今は改心しており、三千院家の執事ともたまに交流している（麻雀でだが）。

理沙

「で、シスターがなぜここに？」

ソニア・シャフルナース

「ああ、それは・・・彼女からクラスメートがこの神社にいらしたもので、挨拶に来ようかと・・・」

理沙

「ヒナか？」

ソニア

「そうですよ。」

理沙

「ならちよつどいい。君達もちよつと手伝ってくれたまえ。」

伊澄・ソニア

「？」

数分後、そこには理沙と同じく巫女服に身を包んだ伊澄とソニアの姿があった。

伊澄

「こんな姿ハヤテ様に見られたら、恥ずかしい・・・」

伊澄は下を向いている。

ソニア

「ヘエ・・・これが巫女服か・・・」

それに比べて、ソニアは落ち着いている。

理沙

「どうしたのだ？」

ソニア

「実はこの前、ハヤテ君の執事復帰のための指導で電車に乗っていた時、ナイフをちらつかせる不審者を退治したんですよ。その時、その男が『オレは巫女さんの方が萌える』と言っていたので、どんな服なのか気になっていたんですよ。」

理沙

「ホウ・・・マニアな表現をするヤツがいたものだ・・・とりあえず、庭掃除を手伝ってくれたまえ。」

伊澄

「はい。」

ソニア

「了解です。」

理沙

「フウ・・・」

理沙がホウキでせっせと庭をはいていると、目の前に怪しげな男が2人現れた。

ザッ！

理沙

「？」

「お嬢ちゃん、オレ達ちよつと道に迷っちゃってさあ。」

「ちよつと道案内してくれないか？」

理沙はこの2人の発言に、いささか疑問を感じた。

理沙

「なぜ私に道を聞く？この神社に来る途中にもたくさん人はいただらう？」

「（鋭いお嬢ちゃんっすね、兄貴・・・）」

「（このお嬢ちゃんを狙おうとしてる事、バレてるんじゃないだろうな？）」

そう、この男達は以前三千院ナギを誘拐して綾崎ハヤテに倒され、ワタルをさらうつもりでサキを誘拐したがソニアに倒された、あの誘拐犯2人組である。

理沙

「まったく・・・用がないなら私は向こうに行くぞ？仕事忙しいのでな。」

そう言っつて、理沙は向こうに行こうとした。

「チッ、こうなったら仕方がねえ！！」

理沙

「え？」

「力ずくでも一緒に来てもらうぜ！！」

そう言っつて、2人組は理沙の腕をつかんだ。

ガシッ！

この時ようやく理沙は悟った。

この2人組は悪者だと・・・

理沙

「ちよつ、キャツ・・・」

ソニア

「何してるんですか、あなた達は!!」

ザッ!

「!!」

ソニア

「あら?あなた達は確か・・・」

「チッ!!」

2人組は急に走り出した。

ソニア

「大丈夫ですか?理沙さん。」

理沙

「あ、ああ・・・」

伊澄

「どうしたんですか?」

タタタ・・・

ソニア

「今、2人組の不審者が・・・」

伊澄

「不審者？」

理沙

「あ、そういえば忘れていた・・・」

伊澄

「何をですか？」

理沙

「今日、後数秒で泉と美希がここに来るのを・・・」

伊澄

「え？」

ソニア

「そういえば、私も忘れてました・・・」

伊澄

「何をですか？」

ソニア

「あの2人組、以前ワタル君をさらおうとしてサキさんを誘拐した誘拐犯達ですよ。」

伊澄
「・・・」

しばしの沈黙。

次の瞬間、伊澄の怒りが爆発した。

伊澄

「どうして、そういう事を先に言わないんですかーっ！ー！！」

理沙

「ス、スマーンー！！」

ソニア

「ゴ、ゴメンナサイー！！」

伊澄

「という事は、今頃泉さんと美希さんは・・・」

「キャーッ！ー！！」

ソニア

「なんですか、この悲鳴は！？」

理沙

「この悲鳴は、美希だー！！」

お決まりの展開である。

伊澄

「急ぎましょう!！」

タタタ・・・

理沙

「泉!！」

せがわいずみ
瀬川泉

「あ、理沙ちゃん！伊澄ちゃんも！それともう1人・・・誰？」

ソニア

「シスターをしているソニア・シャフルナースです。」

泉

「じゃあソニアちゃんだね　って、そんな事言ってる場合じゃないよ!!!美希ちゃんが変な2人組にさらわれたの!！」

理沙

「アチャー、やっぱりそうか・・・」

ソニア

「あそこで倒しておけばよかったですね・・・」

伊澄

「とりあえず、泉さんは警察に電話を!！」

泉

「わかったよ！でも理沙ちゃん達は！？」

理沙

「私達は今から2人組を追いかける！美希がさらわれたのは私達のせいだからな。」

泉

「でも、あの人達車使ってるんだよ！？どうやって追いつくのよ！？」

理沙

「そ、そうか・・・」

ソニア

「大丈夫ですよ。」

ピポパポピピピ・・・

パチン！

ソニア

「今ハヤテ君に私達の現在地をメールで伝えました。彼ならすぐに来てくれますよ。」

理沙

「そうか。美希、待ってる！必ず助けに行くからな！！」

ブオオオオオ・・・

美希は今、2人組の車の中に監禁されている。

美希は手足をキツくロープで縛り上げられ、後部座席に座らされていた。

はなびし みき
花菱美希

「オマエ達、どういうつもりだ！私を誘拐したりなんかして！！子供を誘拐したら重い罪になるという事は、知ってるのか！？」

「知ってるさ。現にオレ達はすでに2回も誘拐してるからな！！」

原作ではナギとワタル（実際はサキ）で2回誘拐をやってます。

美希

「フン、バカ共が・・・私を誰だと思っている！内閣総理大臣経験者の孫娘、花菱美希だぞ！！こういう事をするからには、それなりの覚悟を・・・」

「ヘエ・・・オマエ、政治家の娘か・・・」

美希

「そうだが、なんだ？」

「今日がついてるぞ、弟よ！今まで金持ちのお嬢様を誘拐して執事に倒されたり、ガキを誘拐しようとしてメイドさんを誘拐してシスターに倒されたりと運がなかったが、今回はついてる！今回はか弱

そんな娘の上に、誰も邪魔するヤツがいねえ!!」

「だよな兄貴！一緒にいたヤツだってか弱くて、何の役にも立ちやしねえ!!」

美希

「（執事というのは、ハヤ太君の事だな・・・）泉をバカにするな!!」

「あー？」

美希

「それに、まだ私には理沙がいる！それにオマエ達を一度負かしたその執事とも知り合いだ！！彼らが来たら、オマエ達なんかあつという間に倒されるだろうよ!!」

「うるさい小娘だな!!おい、弟！ソイツの口を塞いでおけ!!」

「わかった。」

ビーツ！

美希

「あ、何をする・・・むぐっ!!」

ペタッ！

美希は口にガムテープを貼りつけられた。

美希

「んゝ、んゝ!」

「やはり、手足を縛っただけではしゃべるからうるさいな・・・」

「これで少しは静かになったな。」

美希

「んゝ、んゝ・・・(クソオ・・・口を塞がれてしまった・・・これじゃあ声が出せない・・・私、今大ピンチだなあ・・・こんな時、ヒナならどうするんだろう?そういえば、ハヤ太君がナギちゃんのお弁当を届けに来た時、ヒナと話をしてるのを見たなあ・・・確か、『言ってくれば助けに行く』と言っていたっけ・・・あれって、誰に対してもそうなのだろうか?うん、そうだろうな。私が助けを呼べば、ハヤ太君も来てくれるだろう・・・だが今私は口が塞がっている・・・それなら、心の声で叫ぶまでだ・・・頼む、私を助けてくれ・・・ハヤ太君、理沙・・・)」

その頃、ハヤテは理沙達のところにたどり着いていた。

ちなみに泉は警察に向かっている。

あやさきハヤテ
綾崎颯

「じゃあボクは今から花菱さんを助けに行きますが・・・朝風さん、伊澄さん、シスター。ついて来ますか?」

理沙

「もちろんだ。」

ソニア

「彼女がさらわれたのは私達のせいですから・・・」

伊澄

「ではハヤテ様、行きましょうか。」

ハヤテ

「ええ。では伊澄さん、背中に。」

伊澄はハヤテの背中に乗った。

ハヤテ

「では、朝風さん達も・・・」

そう言うと、ハヤテは理沙とソニアを抱きかかえた。

ガシッ！

理沙

「ちよっ・・・」

ソニア

「ハヤテ君！？」

ハヤテ

「今から自転車で追いかけたのでは、追いつくのは難しいです。ですから・・・空を飛んでいきます。」

理沙

「え？」

ソニア

「ハヤテ君、今何て・・・」

ハヤテ

「しっかり捕まっててくださいね！疾風^{ハヤテ}の・・・ごとく！！！！」

ドンッ！！

ハヤテは空中に飛び出した。

理沙

「う、うわああっ！？」

ソニア

「キ、キャアアアッ！？」

今ハヤテは、空を飛んでいる。

ソニア

「スゴいスゴいハヤテ君！空を飛んでいますよ！」

理沙

「ものスゴいスピードを出せる必殺技だと以前泉から聞いていたが、

まさか空を飛ぶ事もできるとはな・・・」

伊澄

「いつの間にこれだけの進歩を・・・」

ハヤテ

「ええ、その手のプロに教わったんですよ。最初は空中制御も難しかったですけどね。」

ハヤテに空の飛び方を教えた人物というのは、以前教会でハヤテや伊澄が出会った幽霊神父、リン・レジオスターの事である。

リン・レジオスター

「うまく使えているようだな。」

ハヤテ

「（ええ、おかげさまで。）」

リン

「（君は覚えが早い。ここまで早く使いこなせたのは君が初めてだ。）」

ハヤテ

「（そうですか。ところで、犯人達の車は見つかりましたか？）」

リン

「（ああ、今南西の方角を逃走中のようだ。）」

ハヤテ

「（わかりました。）飛ばしますよー!!」

ハヤテはさらにスピードを上げた。

ドギャンー！！

「ハハハ、今日はラッキーデーだぜ！こつも楽に誘拐できるとはな
！！」

「本当だな、兄貴！！」

美希

「んゝ、んゝ・・・」

ギョオオオオ・・・

「ん？何だ？」

「何の音だ？」

美希

「？」

美希が横の窓から顔を出して上を見ると、空を飛んでいるハヤテの姿が見えた。

美希

「んん！？（ハ、ハヤ太君！？空を飛んでるの！！？）」

ハヤテ

「車の前のボンネットに何かを突き刺せば、動きを止められそうですね。」

ソニア

「なら、ここは私に任せてください、ハヤテ君。」

そう言ってどこからともなく巨大な十字架を出したソニアは、車のボンネットめがけて放り投げた。

ドガッ！！

「うおおおおーっ！？」

「あ、兄貴ーっ！！」

美希

「んゝ！！」

車は急停車した。

急停止した車に、ハヤテ達が追いついた。

ハヤテ

「さあ、もう逃げられませんかよ!!」

ソニア

「美希さんを放しなさい!!」

「フン、そうはいくかよ・・・」

そう言うのと、2人組は美希を腕に抱え、ナイフを突きつけた。

ギラッ!!

美希

「んんっ!!」

「このお嬢ちゃんにケガさせたくなかったら、そこを退きな。」

ハヤテ・ソニア

「くっ・・・」

伊澄

「手が出せません・・・」

理沙

「（親友の美希が大ピンチだというのに、私には何もできないのか・
・・・!?頼む、神様・・・美希を助ける力を、この私に与えてくれ
!!!!）」

その時、ナイフが犯人の手を離れ、1人の頬をかすった。

「がっ!?!」

美希はそのスキをつき、もう1人に体当たりをした。

ドンッ!!

「ぐっ!!」

美希はハヤテ達の元に駆け出した。

タタタ・・・

ハヤテは素早く美希を抱え、犯人達から引き離した。

ハヤテ

「もう人質はありませんよ!」

ソニア・伊澄

「観念なさい!!」

「ク、クソオ・・・!!」

こうして、犯人達は逮捕された。

その後・・・

美希

「助かったよ、みんな。」

ハヤテ

「いえいえ、困った時はお互い様ですから。」

ソニア

「それにしても理沙さん、スゴかったですね！」

理沙

「え？」

ハヤテ

「ナイフをサイコキネシス念動力で動かすなんて・・・」

理沙

「そ、そうだな、アハハ・・・（私はこれからもこの力で、親友達を守っていくんだ。ありがとう、神様・・・）」

もちろん、理沙に念動力を授けたのは、神様などではない。

理沙に念動力を授けたその人物は、ハヤテの横で人知れずクスリと笑っていた・・・

完

（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

理沙に念動力を授けたのは誰なのか？

この話を最後まで読んだ皆さんは、気づいたかと思います。
良ければ感想もくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0391c/>

1人の巫女と不思議な力

2010年10月28日08時49分発行